

A close-up photograph of several bright yellow, spherical flower heads, likely Mimulus aurantiacus, set against a dark, blurred background. The flowers are the central focus of the top half of the cover.

五 行 歌 集

Show-Window

Takashiro Naomi

喬城奈緒海

五行歌集

Show-Window

喬城奈緒海

目次

Opening-Bell	まえがき・杖は世界を広げる	3
1st Stage	グロスの艶	11
2nd Stage	この脚が知っている	31
3rd Stage	泣きたい…	49
Half Time	祭りはいつもここにある——プロ野球本拠地別五行歌	67
4th Stage	真実しか詠えない	77
5th Stage	砕けてしまえる胸	111
Final Stage	深い碧 <small>あお</small>	131
著者解説		153
Curtain-Call	あとがき・愛しい時間	157

Opening-Bell

まえがき・杖は世界を広げる

プロ野球パ・リーグの東北楽天イーグルスの一場靖弘投手は、150キロ前後の速球が持ち味だ。コントロールには難があり、勝ち星には恵まれないが、腕を振り切って打者をぐいぐい押していく姿には爽快感も覚える。一方で繊細でもある。先頭打者を四球で歩かせると、たとえ、それまでノーヒットに抑えていても途端に崩れだすことがある。どんな状況でも平常心を保てるほど、冷徹な精神の持ち主ではない。弱さは勝負の世界では弱点かもしれないが、人間としては十分すぎるほど魅力的ではないか。

あくまで私の想像の域を出ないが、五行歌人の喬城さんは、一場のような女性なのではないかなと思う。

直接お会いしたのは、実は、まだ一度しかない。仙台市中心部の楽天イーグルスの本拠地、フルキャストスタジアム宮城。2006年の初夏（だか晩春）の太陽が照らす外野スタンドで、笑顔を輝かせてイーグルスに声援を送っていた。

この東北でたった一つのプロ球団が、仙台市に本社のある新聞社・河北新報で記者をしている私と喬城さんとの接点でもある。今は岩手県盛岡市に赴任している私は2004年、2005年と球界に新規参入した楽天イーグルスについて、ファンサイドの視点からの取材を担当していた。2005年4月1日、フルキャストで行われた楽天の本拠地仙台での初戦。西武ライオンズを破った快勝を伝える2日付の河北新報に喬城さんは登場する。仙台駅ビルに設置されたテレビの

画面を見入っていた喬城さんは、たまたま、私の同僚の取材を受け、「歴史的瞬間に立ち会いたくて（群馬から）来た。仙台に向かう新幹線の中で（楽天が）勝っていると知り、はやる気持ちを抑えられなかった」と、まさに直球で答えている。

そう、喬城さんはイーグルスのファンなのだ。しかも、桐生一高時代からの一場投手のファンなのだ。

そうした話を同僚から聞かされていた私は、自身の故郷でもある群馬に暮らす女性イーグルスファンの存在をずっと気にかけてきたが、2006年に入って何度も電話で話すことになる。イーグルスが誕生することになった近鉄バファローズとオリックスブルーウェーブとの合併で始まった球界再編とイーグルスの船出について歌った五行歌集を喬城さんが出版し、私が取材することになったためだった。

「ファンとともに歩む球界と新球団であってほしい」「五行歌を通して球界にファンの心を伝えていきたい」。電話の声は常にストリート。その後またたび電話を寄せてくれたが、やはり、気持ちを思いつきりぶつけてくる。こっちは丈夫なミットなんて持ってないんだけどなあ、なんて思うこともあり、どんな女性なのかと、容姿を想像してみたこともある。

それだけに、外野スタンドで初めてお会いしたときは、失礼ながら、想像していなかったきれいな容姿に驚いたのを覚えている。

だが、そうした印象は喬城さんの一面に過ぎない。まっすぐな声の奥底にもう一つの一面があるようなのだ。

手元にメールで送っていただいた数枚の写真がある。レンズをまっすぐ見据える写真は本質を見抜こうとする強い意志がある。目線をやや右下にした写真にはわずかに悲しみがある。イーグルスファンとしてだけでは語れない、歩んできた道のりをレンズはあぶり出したのかもしれない。

この行為が

痩せるなんて

絵空事だと

背中を向けた

男との時間

喬城さんは苦しい恋愛経験を五行にする。

クリスマスと

正月の

間には

避けて通れぬ

幼き魂

大事な命を失った悲しみと、悲しみを背負って生きる覚悟を歌にせざるを得ない経験も抱えている。そして現在には体に爆弾も抱えて、やはり詠う。

病は気から

失った女の気炎を

奮い起たせるために

淡い色彩いろを

施す

おそらく、この本につづられた彼女の作品の数々は、そうした彼女のもう一つの繊細な一面であり、魂の叫びなのだと思う。

一場投手がボールを握ることで打者と向き合うように、喬城さんは五行歌という世界を手にしたことで人生と向き合える。五行歌は生きる杖にもなっているはずだ。

杖は世界を広げる。外野スタンドで初めて会ったとき、喬城さんは新しい友人と一緒にいた。球界再編を歌った五行歌集をきっかけに東北・宮城県の方と親しくなったのだという。人とつながり合える。五行歌を通して喬城さんの人生はさらに広がっていくだろう。

イーグルスの野村克也監督は2006年シーズン前、「一場投手をエースとして育てていく」と語りながら、結局は十分にエースに育てることはできなかった。だが、今後は楽しみな存在であることは間違いない。苦い経験やつらい思いをボールにどう託していくのか。

一場投手の投球表現の行方を見守るように、喬城さんの五行歌の行方を見つめていつてみたい。今回の歌集はその出発点となる。まずは、彼女の思いをまっすぐに受け止めるため、ミットを大きく構えてみたいと思う。

新聞記者 安野賢吾

Opening-Bell まえがき・杖は世界を広げる

